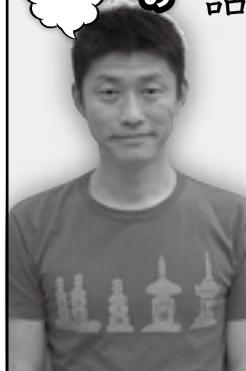


# おしえて 石造美術オタクの話

## ①五輪塔



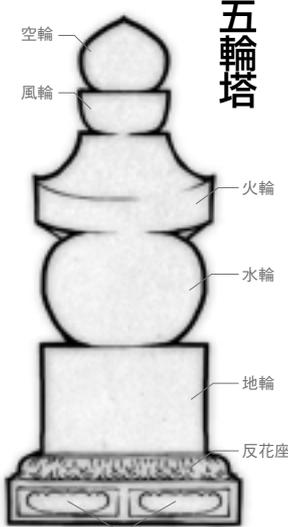
高橋 晋也 / 庵治産地の石材加工メーカーである(有)翼石材企画室の主任。平成21年より、究極のこだわり製品として『世伝石塔』シリーズを開発。総合プロデューサーとして庵治・牟礼産地の優れた加工技術を持つ『庵治石工業』によって制作している。中世の石造物をこよなく愛し、今年4月からは、中世の石塔を中心に勉強をする会、『翼塾』を開講。

初めまして、(有)翼石材・企画室の高橋晋也と申します。最初にお断りしておきますが、私は仏教・お墓の専門家でも学者でもありません。あくまで一石材店であり、ただの石造美術オタクであります。これから述べるお墓の話につきましていろいろなご指摘もあるとは思いますが、ただの石造美術オタクの独り言としてご理解いただければ幸いに存じます。

今回は私なりの解釈で五輪塔の話をお伝えしようと思います。その前に日本人のお墓の原点である仏塔についてちよつと説明させていただきます。

仏塔とは仏教の創始者釈尊の遺骨(仏舍利)を納めた饅頭型のお墓のことでインドでは「ストゥーパ」と呼ばれています。

仏教がインドから中国に伝来し「ストゥーパ」が漢字に音写され「卒塔婆」「塔婆」「塔」などの音写漢字で表記されるようになりました。現在、東京タワーやエッフェル塔なども塔(tower)と呼びますが、それとは異なり、仏教的な塔を「仏塔」と呼びます。



格狭間

五輪塔は長きにわたり、在銘最古の五輪塔は平安時代後期(1169年)の岩手県中尊寺の釈尊院五輪塔です。鎌倉時代後期に全盛期を迎え、遅くとも室町時代には庶民のお墓とし



円通寺五輪塔 (香川県)

今回ご紹介する五輪塔は香川県綾歌郡宇多津町にある鎌倉時代後期の円通寺五輪塔です。

細川頼之の供養塔と伝えられ、四方梵字が刻まれ非常に均整のとれた五輪塔です。花崗岩製で総高は175cm(反花座含む)を測ります。奈良県西大寺観尊五輪塔や愛媛県石手寺五輪塔などと形態的類似性が指摘されています。

釈尊は臨終の時、最後の説法をされ、「アーナンダよ。世界を支配する帝王の遺体を処理するのと同じように、修行完結者の遺体を処理すべきである。四つ辻に、修行完成者のストゥーパをつくるべきである。誰であろうと、そこに花輪または香料または顔料をささげて礼拝し、また心を浄らかにして信ずる人々には、長いあいだ利益と幸せとが起るであろう。」

パ(仏塔)を造塔した理由は、決して遺骨を保管するのためや生きた証し・目印にするためではなく、釈尊の遺骨(仏舍利)を納め礼拝供養すれば、死者も生者も利益と幸せを約束されるからであり、そこには確固たる仏塔思想があったのです。この仏塔思想こそがお墓の本質であり、今日まで長く礼拝供養の対象になった理由だと思えます。

それでは、ここからは日本人のお墓としての五輪塔についてお話しします。五輪塔は長きにわたり、在銘最古の五輪塔は平安時代後期(1169年)の岩手県中尊寺の釈尊院五輪塔です。鎌倉時代後期に全盛期を迎え、遅くとも室町時代には庶民のお墓とし

でも普及していきまします。ちなみに中尊寺には釈尊院五輪塔の他に願成就院宝塔という平安時代後期の造立とされる宝塔もあり、特徴は相輪を立てずに請花宝珠とし、屋根以上を五輪塔の空風輪のような形状で作られています。釈尊院五輪塔ともにも非常に見応えのある石造物です。

五輪塔の考案者は平安時代後期に活躍した真言宗中興の祖覚鑊上人です。その覚鑊の著書『五輪九字明秘密釈』が日本人のお墓としての五輪塔の根本となっています。著書の題の「五輪」とは「地・水・火・風・空」のことで大日如來の真言「ア・ヴァ・ラ・カ・キヤ」の真言「オン・ア・ミリ・タ・テイ・セイ・カ・ラ・ウン」を示しています。「明」は真言(智慧を生じる音声)、「秘密」は密教、「釈」は釈釈の

意味です。大日如來と阿彌陀如來それぞれの真言を密教的に解釈することをこの著書で論じています。覚鑊が活躍した平安時代後期は浄土教(阿彌陀如來を信仰し、来世には極楽浄土に往生することを目指す)が流行していた時期であり、その著書の中で真言密教と浄土教の融合思想を述べています。簡単にいえば「大日如來=阿彌陀如來」「即身成仏=極楽往生」となります。そもそも五輪塔は大日如來そのものですから、結果的に「五輪塔を建てると死者を成仏させ極楽往生させる」ということになります。

それまでのお墓は単なる埋葬地だったわけですから画期的なお墓の誕生だったのです。これこそが五輪塔の仏塔思想の本質であり、だからこそ貴族や武士といった上流階級から庶民にまで普及していったのだと思います。

ここからは私の個人的な意見ですが、ごく当たり前のように私たち生き続けている人は亡き人の冥福を、言い換えれば幸せをお祈り申し上げまします。亡き人も、もしも死後に魂があるのなら、お墓参りに来る私たちの幸せをきつと願っています。お墓とはそうしたお互いの「どうぞ幸せに」と思い合う心を交換する場所です。時代の変化とともにお墓の形も変化し続けています。もちろん形の変化に正否はありませんし、五輪塔や宝篋印塔といった仏塔でなければお墓でないというわけでもありません。ただ、お墓の本質までも変化してしまつたらもはやお墓ではなくなつてしまっています。

最後に、この度述べさせていたいただきました内容は、今年1月9日にご逝去されました石文化研究所所長 小島宏允先生に師事して学んだ仏塔思想を私なりに解釈させていただきました。非常に純な内容ですが、小島先生が講義や雑談で何度も繰り返しておっしゃっていただきました。私も初めて聞いた時には「そういうことなのか!」と本当にスッキリした気持ちになつたのを今でもよく覚えていています。この場をお借りして謹んでご冥福をお祈り申し上げます。